双子海賊

サイキアスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
双子海賊

【Ｎコード】
Ｎ５４６０Ａ

【作者名】
サイキアスカ

【あらすじ】
二人は、貴族の子であり、海賊だった。喋り動く謎が多すぎるテディベア二匹（？）とともに、海を漂う。テディベアの目的を達成するために、仲間を増やし、友情を深めていくストーリー！

第一章・赤　ド　ク　ロ

広すぎる海の真ん中。
その上に、この海に比べれば小さすぎる、しかし人にしてみれば大きすぎる船が浮かんでいた。
そして、人にしてみれば大きすぎる船の上に、子供が二人。ハンモックで寝ている。
一人は男の子。ムービングツイストパーマで透明なキャラメル色の髪と眼。
黒いキャップに黒いデニムノースリーブジャケット。前を開けている。
そしてその下には黒いＴシャツ。そして、下には黒いカーゴパンツ。かなりぶかぶか・・。靴は、真っ黒なスニーカー・・・と黒いものしか着ていないような少年。
そして、もう一人は女の子。少年と同じ色の髪と二重の大きな眼。髪は腰まであり、左右両サイドで縛っている。
そして、少年と同じで黒色の服を着ている。違うのは、カーゴパンツではなく、オーバースカートになっているぐらいだ。後は、キャップも上も靴も同じ。
二人とも、おとなしくしていれば、美少年・美少女といわれるほどだ。
そして、二人の横にある可愛らしいテディベア。
４６９ほどのサッカーボールの大きさで、少女の方が薄い水色。少年のほうが赤色。
薄い水色のテディベアは眼が少女に似ていてくりくりとしている。
赤色のテディベアは眼が半円でちょっとつりあがっている。
二つとも可愛らしく笑っている。
しかし、このテディベア。普通ではなかった。
「起きろ――――――――――ッッッ！！」

「敵だぁ――――――――――ッッッ！！」
このテディベアは喋る。
「んぁ？」
「んん～？」
二人はむっくりと起き上がる。
「敵ぃ？」
「そんなのいないよぉ・・」
二人はまだ眠いのか、こっくりこっくりと揺れている。
「おらっ！さっさと起きろ！」
しかも、動く。
「ったくも～・・オレらから望んだことだけどよ～・・」
「いいじゃん・・別にぃ～・・」
「ったく～、こんなんじゃ、海賊になれないぞ！？」
『はぁ～い・・』
こんなことになったのは、つい最近。
二人の誕生日だった。

ハッピーバースデー！
と書かれたウェディングケーキより大きいケーキの上に乗っているチョコレート。
その周りには、大勢の・・といか多すぎるほどの人&机と料理。
二人は、この宇宙に浮かんでいる惑星・「ミラード」の中に存在する国・ラスタの貴族の子だった。
二人は、一応双子だ。
一応と言うのは、二人は血が繋がっていない。
それは、二人の父親が見事に浮気をしていたからだ。
二人は父親と同じ髪と眼の色を受け継いだ。この色は貴族の間にしか生まれない。

二人の母親はもちろん、貴族。
そして、少年は少女の家へと養子に行った。
それは、二人が2歳のとき。
それから、8年。二人は10歳になった。
そのとき、両親から貰ったプレゼントがこれだ。
あやうく、どっかの小さい国をプレゼントされるところだった、とメイドさんに教えてもらった。しかし、10歳に政治は任されないという理由で却下だ。というより、もともと無理だろう。この案は二人の母親が出した案だ。能天気な母親二人だった。
そして、部屋に戻り、テディベアに名前をつけようとしたときだった。

「変な名前をつけるな！魔法が解けるだろうが！」
「そうだ！おいらたちの名前はちゃんとあるんだ！」

と叫んだ。
『え・・・・・・・・？』
二人はモチロン、呆気に取られた。
そして、ぴょこん、と動いたかと思うと、走って二人の頭を叩いた。
結構痛い。
「何！？なにがあったんだ！？オレたちは夢でも見てるのか！？」
「違う！これは、夢じゃない！」
二人はパニック状態になった。
そして、すぐさまテディベアに向き合う。
「だ・・誰だ？オマエら・・」
こくこく、と少年の言葉に頷く少女。
「おいらたちか？おいらたちはな、水色のほうがドー。で、おいら、赤色がクロだ！」
「ドー・・クロ・・？ドクロ？」
「そうだ！ドクロ様だ！どうだ！恐れ入ったか！？」

「・・・テディベアに入ってるからな・・・」
「全然しないよね・・？」
二人は顔を見合わせる。
「うるせー！オレっちたちは好きでこんなものに入ってるワケじゃねーんだ！どーせならあのカッコい～いロボットに入りたかったぜ！」
水色の方――ドーが愚痴をこぼす。
「しょーがねーだろ・・」
と、ないている（マネ）をしているドーを赤色の方――クロがなぐさめる。
「そうだ、一つ、オマエらに聞きたいことがある」
「な・・なんだ？」
「何・・？」

「オマエら――――海の上で旅する気・・・ねーか？」

テディベアの一言。

二人の好奇心を探るのには最適な一言だった。

第一章・赤　ド　ク　ロ（後書き）

こんにちわ。見ていただきありがとうございます。
それでは、さようなら。
（→短いですね）

第一章☆第一話

「どうだ？」
「・・・・・い・・・行きたい・・っ！」
「う・・・うんっ・・・！」
二人は同時に頷いた。ドーはそれを見て、腕を組みうんうん、と頷く。
「やっぱし、子供はこうじゃなきゃな！さぁ、用意するんだ！」
「うん！・・って、ねぇ、母様の許可は？」
「ん？あ・・・どうしよ・・」
「ん？何だよ、別にいいじゃねーか！」
ドーの言葉に少女は、
「よくない！」
と、叫んだ。あまりにも大きい少女の声に驚き、ドーはクロの後ろに隠れる。
「だって、前母様、あたしたちとかくれんぼしてて・・屋敷の中に隠れてたら、陸軍と空軍出してあたしたちを探し出したんだよ！？」
「そういやそうだな・・あやうく戦車とか出しそうだったな」
「陸軍に空軍・・に戦車・・・無断で行ったらヤベェな・・さっさと行って来い！ついでに食料とかも話しつけとけよ～！」
「おっし！」
バッターンッッッ、とイキオイよく閉められたドア。
二匹は部屋の取り残された。
「・・・・・上手くいくかもな・・」
ドーはつぶやいた。
「そうだな・・あいつら・・・単純だな・・」
クロはそういった。
二匹は互いに頷いた。
「これで、一つに戻れるな・・・！」

二匹は涙を拭くマネをした。

「いいわよ♪二人とも♪」
『えっ？』
旅に出たい、と言ったところ、案外早く許可してくれた。
今だけ、母親が能天気でよかったと思う。
「だって、あなたたちは今日で１０歳♪国をあげれなかったもの・・・
これぐらいは許すわ♪」
「・・ホントいいの？母様・・？」
少女は年には念をと言うことか何度も聞き返す。
「なんで？あなたたちがしっかり出来るなら、母さんは止めないわ」
そう言って母親は、近くにあった受話器を取った。
「もしもし？あなた？わたしよ、ミルイユよ。あのね、この子達が
海で旅したいんですって」
海なんて言ってません！
なんで、分かるんですか母様！？
「えぇ・・そうよ・・それで・・・用意してほしいのよ・・うん・・
ありがとう！じゃ」
ガチャン、と受話器を置くと母親――ミルイユは言った。
「船、用意できるって♪」
この人は何者――――――――――ッッッ！？
あたしたち海と言う単語を行った覚えはありません！
二人の意見は同じだった。
そして、ミルイユは二人を引っ張って、ある倉庫に連れて行った。
「ここは、武器庫よ♪」
「武器庫？」
「そうよ、旅に出るなら武器は必要よ♪どれか持って行きなさい」
ミルイユはそう言って、二人を中に入れた。
そして、二人はいろいろ見た後、自分が最も気に入ったのを選んだ。

「ミツキとミズキは短剣二本？一緒なのね～」
「そりゃ、得意なものがコレですから。嫌だけどな」
「なによっ！あたしだって嫌よ！」
「じゃあ、やめればいいじゃねーかよ！」
「そっちこそっ！」
「まぁ、仲がいいのね～。母さん嬉しいわ～」
『違うっ！』
「ほら、ハモッた♪」
ミルイユは、きゃぴきゃぴと子供みたいに笑う。
二人は同時にため息をつく。
「母様って・・・」
「子供だな・・・」
二人は、薄く苦笑い。
ミルイユはまだ笑っている。

「おっ、武器まで貰ったのか～」
「一緒じゃねーか！仲良しさんだな～」
『最悪』
二人は、罰の悪そうな顔になる。
「・・・・・・・・・あっ、そ～いや、二人の名前、聞いてなかったな～」
「・・・・オレはミズキ」
「あたしはミツキ」
「・・・・・オマエら、もしかして双子か？」
クロが腕を組みながら聞き返す。
「一応」
「血は繋がってない」
「へ～・・・って、何だアレ！？」
突然、ドーが叫ぶ。
「何だ？ってええええええええっ！？」

続いてクロも叫ぶ。
「何なに～？？」
ミツキは二匹が見ている窓から顔をのぞかせる。そして、
「かあさまああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！？」
ミツキが突然叫ぶ。
母様という言葉に反応してミズキも顔をのぞかせる。
「母様・・・・・・・・・・何してるんですか・・？」
二人＋二匹が見たもの一体どれぐらいの大きさだ？と言うぐらいでかすぎる船。
しかも空を飛んでいる。
「いやっ！死ぬ！」
ミツキが震える。
「オレっち死ぬのか？」
「おいらまだ死にたくねぇ・・・」
二匹気絶寸前。
二人崩壊寸前。
「二人とも～、あの船はどうかしら～？」
突然、ドアが開いてミルイユがたずねる。二匹は慌てて動かなくなる。
「母様っ！でかすぎです！せめてあれの四分の一！出来れば五分の一！」
ミズキは必死になって言う。
「そうだ・・・母様・・今すぐアレを引き返してもらうよう指示出して！じゃないと街に落ちたら、大変なことに・・」
「そう？じゃ・・・もしもし？それ、すぐ引き返して、作り直して頂戴。それの四分の一の大きさで・・・ちょっと待って・・ねえ、二人とも、何で作ってほしい？木？それとも鉄？」
『・・・・木！』
「だそうよ・・えぇ、・・そう・・・お願いね・・・」

プッ、と携帯（！？）の電源を切る。
「母様、普通ですか！？ホントに大丈夫ですか？」
「えぇ、後二分後には出来るわ」
「早いです！母様！」
「オレ・・めまいが・・・」
「あっ、ミズキ！」
ミズキは数歩後ろに下がった。
「あら、この国の総力をあげれば１０秒で出来るかもしれないわ」
「総力挙げなくていいです」
「そうかしら？まぁいいわ。ほら、出来たわ」
「二分もたっていません、母様」
「ミツキ・・帰ってもらおう・・」
「そうね、母様、用意をするので・・」
「そう？じゃ、わたしは政府に連絡を・・」
『結構です』
「あら、そう？」
母親にきっぱりと子供二人は言う。立派だな、と二匹は思う。

「オマエらの母親は楽しいヤツだな」
「そうだよね？結構・・・・・・・・・・・・・・・・・・
なにがある？」
ミツキはいい所を探しているが、天然としか思いつかない。
「う～ん・・・・・何かあったっけ？」
「オマエ・・自分の母親なのにわからねーのか・・・？」
「うん！」
「喜ぶことじゃねーよ」
「そうだね～・・・って、ドー、クロ何してるの？」
「んぁ？なんでもない！ははは！」
「そうだ、オレッちたちは何もしてません！」
二匹は何かを隠すようにして、腕を後ろに回す。

「危険だな・・」
「そーねー・・って、あれは母様!?って、後ろに船!その中に食料いっぱい!」
船に向かう途中、ミルイユが指示を出して、食料などを運んでいる。
「死ぬ心配はないけど・・・・」
「沈む可能性はあるかもな、おいらたち」
一気に静まりかえるその場。
「で・・でも大丈夫!」
「そうだ!」
二人はなんとか乗り切った（？）

「じゃ、バイバ～イ!」
「お土産頂戴ね～♪」
「無理でぇ～す!」
「そう～?まぁいいわ!頑張ってね～!」
「は～い!」
ミツキとミルイユはもしかして最後になるかもしれない親子同士の会話（たった十秒）を終えた。
それを、羨ましそうにミズキは見る。そして、一言。
「ずる・・・」
たった十秒の哀しい会話に嫉妬（？）をするミズキを無視し、ミツキは手を振っている。
「・・・・・・・・」
クロは不満そうな顔のミズキを見ていた。

そして、あれから三日。
いまだに二匹の目的を聞けない二人。
そして、今、ゆっくりハンモックで昼寝。
二匹もそれぞれに用意された、大きな籠に布を敷いて寝ている。

太陽の日差しが二人＋二匹を深い眠りにつかせる。
ミズキがごろん、と寝返りを打つ。

遠くの方。
黒い影がいくつか、青い海の上に浮かんでいる。
それは、二人の船に向かって進んでいる。
その先頭の大きな船。
その上にいる、大男はにやり、と笑った。
「オイ・・・アイツらを殺るぞ」
低く、野太い声は、楽しんでいた。

第一章☆第一話（後書き）

新連載物です。
頑張っていきますので、よろしくお願いします。

第一章☆第二話

蒼い海。
波も酷くはない。
ゆ～らゆ～らゆ～ら・・・・。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・逆に暇だ」
ミズキは甲板にいた。
穏やかな風が髪を揺らす。
ミツキとドクロ（まとめて呼ぶときこう呼ぶことになった）たちは無駄にある、船の中の部屋でトランプ中だ。
今のところ、ドーが圧勝らしい。先ほどからミツキとクロの悲鳴が聞こえる。
人形に負けてますよ。人間。
はぁ、とため息をつき、ミズキは遠くを見る。
「あ・・・・・・・・・・・・・・・」
そして、小さくつぶやいた。
「敵だ・・・・・・・・・・・・・・」
すぐさま、一人とドクロに知らせるため、船の中の部屋へ行く。
船の構造は、地下一階が生活すために必要な部屋（キッチン・トイレ・バス・部屋）がある。
地下二階は食料庫・武器庫などなど。
地下三階は特に何もない。これから何かを置く予定だ。
そして、迷惑なことに、一人とドクロは地下三階でトランプ中だ。
何故そこでやるのかは「気分」だそうだ。
猛ダッシュで地下三階まで降りる。
そして、一体何に使うんだ？というぐらいある部屋を見ていく。
幸いなことに、一つの部屋から光がこぼれている。
「――――ぜってー、ここには入れさせねェ・・！」
ミズキは怒りがこもった口調で言う。

「なんで、地下三階で一番奥の部屋なんだよ・・・急いでるんだよ・・・これも気分か？」
ミズキは急いで奥の部屋に行く。
そして、ドアをイキオイ良く開ける。
バンッ
「わっ」
「なんだ？」
「ミズキか？」
「ったく～～・・・敵だよ。もしかしたらのために、上に上がって来い！」
『えぇ～～～～～！？』
ふざけんじゃねー。
・・・・ジャンルを「コメディ」に変えようか。
「とにかく、来い！んで、そこでトランプでもなんでもしろ！」
『わかった！行くぞ～！』
一人とドクロはすぐさま階段を駆け上った。
「子供め・・・・」
ミズキも急いで上に上がる。

上がると、一人とドクロ（めんどくさいので三人）が呆気に取られていた。
「どした？」
ミズキが声を掛けると、ミツキはミズキのほうを見た。そして、
「かっくいい！」
の一言。
今、海に突き落とそうかと思った。
と、その多数の船は、こちらに向けて、大砲を向けた。
「うわっ、イキナリ！？オイっ！ミズキ！舵を取れ！」
「・・・・・・・・ポチ」
ミズキがリモコンを取り出した。そして、そのリモコンの右矢印ボ

タンを押した。
すると、ゆっくりと船が動いた。
「・・・・・・・・・・・・・・」
三人はまた呆気に取られた。
「二人じゃ人手が足りないから♪、という手紙があります。ここに、はい」
「母様ですね？」
「はい、そうです」
「便利ですね」
「はい、そうですね」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・まぁ、じゃあ、準備しろ～！接近戦は大丈夫か？」
ドーが二人に聞く。
『モチロン。コイツのせいで』
二人は同時にそれぞれを指す。
「そうか、じゃあ、まず大砲の扱い方だ・・・ってリモコンがあるな！便利だな～！！」
クロは、ケラケラと笑った。謎だ。
「じゃ、まず弾を入れるぞ！ここから出る仕組みだな？」
ドクロたちは仕組みをさっさと理解していく。
そして、次々とこうしてくれ、と指示を出す。
二人は、それに従い、実行していく。
弾は床の仕組みから、大砲の土台まで運んきてくれるので後は弾を入れるだけだ。モチロン、二人の力では無理なので、大砲と繋がっている床の穴に弾をいれ、発射させる。
「結構、重いんだね」
ミツキはそういいながらも、弾を転がして穴に入れる。
大砲が床より低くてよかった。じゃなきゃ、持ち上げれないもんな。
二人はごろごろと転がしていく。ドクロも二匹で頑張っている。
と、ドオォン・・と大きな弾が二人の船に向けて放たれた。

「うわっ！」
目の前で大きな水しぶきが上がった。
「よしっ、準備は出来たな？よしっ、撃て――――ッッッ！！」
ドーが叫ぶ。
それと同時に、船から弾がいくつか放たれる。
それは、綺麗な放射線を描き、相手の船の近くへと落ち、大きな水しぶきを上げる。
「やったぁっ！」
ミツキは両手を挙げて叫ぶ。
が――――・・。
ドォーン・ドォーン・ドォーンと続けて放たれる弾。
「ひぃぃっ！」
「ミツキ！これを入れろ！」
ミズキは弾を思いっ切り蹴っ飛ばす。
それをミツキは足の裏で止める。
「なんか、サッカーに一瞬見えた」
これが、この重い弾ではなかったら、見事にゴールできただろう。
キーパーがミツキではなかったら。
ミツキは蹴られてくる弾を続けて入れていく。
ドォン・ドォン・ドォン・・二人も負けてはいない。
まぐれで空中で当たったり、相手の船にぶつかったり。
こちらは、船じゃない、と言うほどに船が移動する。
なので、船に当たることはない。
しかし、周りでは水しぶきが何回も上がっている。
「水にも飽きたな・・」
ミズキが本音を漏らす。
「じゃあ、炎？」
オマエはこの船を沈ませる気か。
そんなことを思いながら、弾を打ち続ける。
と、その船がスピードをあげて、こちらの船に向かってきた。

「うわっ、来たよ？ミズキ～！」
「うん、来たな。きっと接近戦あたりかな？」
「おしっ、オレっちたちは武器の用意だ！」
そして、二人は、近くに吊るしてあった短剣を持つ。
一人二本。二刀流だ。
二人は、一応貴族。自分の身は自分で守るということで、剣の使い方などを習っていて、以外にプロ並に成長した。
ドクロたちは、武器庫から、予備用にと、銃を渡してくれた。
「おいらが選んだんだ！いいやつだぞ！きっと！」
信用できねーよ・・。
「ホントに大丈夫か？」
ミズキは聞く。
「おう！オレっちたちに任せろ！てことで肩に乗せろ！踏み潰されるのは嫌だ！」
「うわっ、乗っかるな！って、ミツキ！オマエも一匹持て！」
「はいは～い！」
そう言ってミツキはドーを肩に乗せた。（立っていることがすごい）

「よしっ！じゃあ、行くぞ！」
クロが叫んだ。
多数の船は、だんだん近づいてくる。

第一章☆第二話（後書き）

見てくれてありがとうございます。

第一章☆第三話

ゴクッ、と息を呑む。
近づいてくるにつれ、船に乗っているヤツラの姿がはっきり判った。
一番先頭の船の甲板で仁王立ちになっているのがボスだろう。
派手な服を着て、命令している。
その後ろには、船が五つ。
いずれも大きい。
「・・・・・・・・・・・・・・・あれ？」
ミツキが何かを見つけた。
「何だ？」
ドーが問いかける。
「あの子・・・・・・・・きっとあたしたちと同い年だよね？」
ミツキが指差した先には、青色の髪と眼をした二人と同い年ぐらいの少年がいた。
手には、銃を持っている。それも大きい。
「そうだな・・・・でも、あの船にいるってことは“敵”だ。手加減なんかするなよ。多分、あの構え方からして、力はボスの次当たりかもしれない・・・・・・・・きっと」
ボス船に乗っている少年。
ドーによれば、ボスの次に強い存在らしい。
「ま、いっか」
「切り替え早いな・・・・・・・・・・これを・・・・単純って言うのかな？」
ミズキは少し考える。
「うわっ、何こいつ！兄貴だからって」
「いや、関係ないだろ。ていうか、兄貴だったら敬語の一つでもつかわねーのか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・無理です」

「あ、っそ」
「うわっ、折角微妙だけど使ってやったのに」
「お～い、別の世界に行かないでくれぇ～」
クロがミズキの頭に寄りかかりながら言う。
「そう？ごめんね」
ミツキはにこっ、と笑って攻撃の態勢を少し崩した。
「あっ、体制を崩すときけ・・・・！」
と、ドーが言った瞬間、

「・・・・――やるな、チビガキ」

少年が言う。
そこには、先ほどの少年が銃を剣代わりにしながらミツキの前にいた。
「早いな、流石だ。ネズミ――いや、ミツキ」
「ネズミじゃな――――――いぃぃッッッ！ミズキのアホ！」
「いや、ミツキ、ソイツをどうにかしないと」
ドーが冷や汗をかきながら言う。
「そうね」
キンッ、と銃を跳ね返し、ミツキは少年と距離をとる。
「ミツキ、油断するな」
「わかってる、さっきのは悪かったよ、ミズキ」
軽く会話を済ますと、二人は攻撃態勢を整えた。
「オマエら、素人じゃないな」
少年は、にっ、と笑う。
「それじゃないと、楽しめないってもんだ」
「そうか、じゃ、こっちも楽しませてもらう」
ミズキは少年に言う。

「ボス、あいつら・・・」
船に乗っている乗組員が耳打ちする。
「何だ？」
「あの髪の色は・・・・・・――――貴族ですよ。上級貴族」
「貴族？貴族のガキが海賊？珍しいな」
「どうします？捕まえます？結構いい値段になるかもしれませんよ」
「ほぉ・・・・・・そうだな・・・・・捕まえるか」
ボスは、少年と同じように、にぃ、と笑う。

少年は走り出した。
二人に向かって。
「おいらたちが指示を出す。従ってくれ」
「うん、判った」
「オッケー、任せて！」
二人は、ドクロの指示に従い、分かれた。
ミズキが少年の前、ミツキが少年の背後。
「・・・・・・・・・」
少年は二人を見てから、銃を構えた。
「行くぞ」
少年はそういい、走り出した。
ミズキに向かって。
「ミズキ、左前方に移動！」
ミズキは言われたとおりに動く。
少年はそれを追いかけ、後をついてくる。
「あ～、オレ持久走苦手なんだよな～」
ミズキはぼそっ、とつぶやいた。

「ボス、ミロゥに言います？」
「そうだな、言っとけ、殺さないようにとも」

「ミロゥが不機嫌になりますよ？」
「構わん、言え」
「はい」
乗組員は急いで、他の乗組員に連絡した。
しばらくすると、少年と同じ色の髪をした少女が出てきた。
「オマエ、おとなしくしとけよ」
乗組員は銃を少女に突きつける。
「お兄ちゃん・・・・」
少女は小さくつぶやく。

ミズキが逃げている間、ミツキは少年を追っていた。
「速い。かなり」
ミツキは好奇心にあふれたように眼を輝かせる。
「怖い、何かを絶対たくらんでいるようだ」
ドーがつぶやく。
「大丈夫、あたし、鬼ごっこ、大好きだから♪」
ミツキはにぃ、と笑うとスピードをあげた。
「でも、ミズキ、逃げるほうは得意じゃないんだよね」
「マジ！？」
「うん、シャトルランは確か・・・・・・五百二十一回。あたしより一個下」
「ヤバイよ、それ」
「そうなの？」
「あぁ」
二人は会話を終えるともっとスピードをあげた。
少年は後五メートルほどでミズキに追いつきそうだった。
「お・・・おい！ミズキ・・・？」
「大丈夫、きっと」
ミズキはそっけなく言うと、ちらり、と少年を見る。
少年は、疲れた様子も見せず、追いかけてくる。

「はあ・・・・面倒なことになったな」
ミズキはまたため息をつく。
と、少年が銃を構える。
「ミズキ、右に合図したら移動だ」
「判った」
少年がトリガーを引く寸前、
「右に移動だ！」
ミズキが移動した。
しかし、声はコレだけではなかった。

「ミロゥ！止めろ！」

「・・・・・・・ドウ？」
少年は、銃を下ろした。しかし、追いかけながら。
「そいつらを殺すな！」
「何故？出来ればそれは遠慮したい」
「これでもか？」
乗組員はにやり、と笑った。
「！？」
少年はそれを見て、眼を大きく開けた。
「リロゥ！？」
少女は五～六歳ごろで、汚れたワンピースを着ている。
「こいつがどうなってもいいなら、そいつらを殺せ」
「くっ・・・！」
「お兄ちゃん！わたしはどうなってもいい！お兄ちゃんは逃げて！
じゃないと・・・」
少女――リロゥは兄である――ミロゥに向かって叫んだ。
「うるせぇ！黙ってろ！」
乗組員は少女を殴る。少女は後ろに飛ばされる。
「リロゥ！？ドウ、止めろ！」

「じゃあ、早くそいつらを捕まえろ！」
「・・・・・・・・・・・・・判った」
ミロゥは、眼を閉じ、また開け、二人を見た。
「今の話は聞いただろう？オレはオマエらを捕まえる」
少年は、先ほどより速いスピードで二人を追いかける。
「お兄ちゃん！やめて！もうそんなこと！」
「黙ってろ！」
今度はミロゥが叫ぶ。
「ぁ・・・・・何で・・・？お兄ちゃんは何もしてないのに・・・
お兄ちゃん・・・・」
リロゥは床にへたり込み、泣き出す。
「うるさいぞ、ガキ。いい加減黙れ」
乗組員がもう一度、リロゥを殴ろうとする。が、

「やめなさい、ドウ。この子はアタシが見てるわ」

「え・・・・、やまはさん！そうですか！？それでは！」
乗組員は逃げていく。
やまはといわれた女性はリロゥの傷をぬぐう。
「大丈夫、ボスはさっき逝ったわ」
「逝った・・？」
「えぇ」
やまははにっこり、と笑う。
リロゥはやまはの手についている血をつけた。
「それ・・・・・・・・・？」
「これ？あぁ、これがボスの、よ。今はアタシがボス。ていうか、
これからずっとボス」
やまはは「あはは」と、笑った。
「証人はいるもの、大丈夫」
またやまはは笑った。

「やまはさん、なんでわたしを？」
「さぁ？でも、コレだけは分かるわ」
「？」
「あなたにはアタシと同じ道は歩ませない」
「アタシと同じ・・・・・・？」
「そう、アタシも同じ事があってね。きっとキミにアタシを重ねちゃったんだろうね」
やまははやっぱり笑った。
よく笑う人だな、とリロゥは思った。

パアァンッ

銃声が響く。
「お兄ちゃん！？」
リロゥが見る先には、甲板の先まで追い詰め、銃を二人に向けるミロゥ。
「・・・・・・・・・・撃たないのか？」
「撃つ必要はないよ？あの子、無事だもの」
ミツキは言い、笑った。
しかし、銃の構えを動かそうとはしない。
「お兄ちゃん！わたしは大丈夫だから！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「お兄ちゃん？」
リロゥは身を乗り出し、問いかける。
ミロゥは銃を下ろした。
そして、二人の下へ歩いてきた。
「ねぇ、なんでだろ？」
「何が」
「剣を構えなくてもいいと思うのは」
「さぁ？でも、同感」

「やっぱし？ドクロたち、どうしようか？」
「いいんじゃね～？」
「やっぱ？？」
四人はにこ、と笑うとミロゥを見た。
ミロゥは四人の前で止まった。そして、
「少しだけ、楽しかった。今度は本気でやれよ」
ミロゥは、極悪な笑みではなく、心から笑っていた。
「そうだな、たっく、バレてたのは驚きだった。今まで見分けた人はいない。だから、修行もサボれた」
「聞いてない聞いてない」
ミツキがツッこむ。
「はは、そうだな」
「オマエはこれからどうするんだ？」
「そうだな、まず・・・・・・・・・・・・リロゥを親戚に預ける。それから――――」
ミロゥが言おうとしたとき、

パアアアンッッッ

今度はもっと大きい銃声がし、ミロゥを撃った。
『――――――っ！？』
四人を始め、リロゥややまはも驚いた。
「誰だ！？」
「チッ」
影はやまはの銃により、殺された。
影の血が飛び交う中、何かが蒼い海に落ちたのをリロゥはみた。
「お・・・おに・・・お兄ちゃああああああああああああああああああああああああああああんっっっ！？」

リロゥが船を飛び降り、駆け寄る。
「キミが、リロゥちゃん？」
ミツキが問いかける。
かなり動揺しながらも、リロゥは頷く。
「お兄ちゃんは！？」
「海の中」
ミズキが普通に言う。
「お兄ちゃん！」
蒼い海がある一部分だけ紅く染まる。
「いや！お兄ちゃん！お兄ちゃん！」
そこから泡が浮かんでくる。しかし、それもだんだん消えていき、しまいには浮かんでさえもこなくなった。
「ぁ・・・・あ・・・・・・いや・・・・・・ぁ・・」
うつろになったリロゥの目は蒼い海と同じ色の空を見てから、甲板の床を映した。
「リロゥちゃん！？」
「ミツキ、ちょっと上着持ってろ、ついでにロープも」
「あ、うん、はい」
上半身裸になり、渡されたロープを腰に巻いたミズキは海に飛び込んだ。
「キミ、なんていうの？」
「え、ミツキです」
「ミツキね？まず、タオルとか用意して、救急箱とかはどこ？」
「あ、それならそこの部屋に」
地下では無い、甲板にある小さな、しかし、キッチンやらいろいろある部屋にやまはを案内した。
「うわ、結構大きいな」
「気にしないでください、あ、これです。タオルと救急箱」
「ありがとう、ベッドとかある？」
「この下に」

「そう、この子を連れて行くわ」
「分かりました」
やまははリロゥをつれて、地下に進んだ。
ミツキは、ロープがつながれている場所にタオルなどを持っていった。
丁度、ロープが動いている。
「引き上げるのよね？よおっし！」
一気にロープを引っ張る。
すると、海面にまで二人は上がってきた。
「大丈夫！？」
「こっちは！コイツ・・・なんだっけ？」
「ミロゥ？」
「そうそう、ミロゥは水をかなり吸ってる！」
「分かった！今引き上げる」
ミツキはロープがつながれたゴムボートを海に投げる。
ミズキはそれに乗り、引き上げてもらう。
ゴォン、と船が揺れる。すると、カカカカカカカカカカカ、と音を立てて、ボートが上ってくる。
そして、甲板まで上がってきたボートから二人を下ろす。
まず、タオルをかけ、ミロゥには応急処置をする。一応、怪我の対応の仕方も習っている。
そして、やまはにミロゥを預ける。
ミロゥは意識はもうろうとしているが、命には別状はないみたいだ。
撃たれたのは、右腕であり結構深い。
続いて、ミズキだ。
一応、今は初夏だ。しかし、この地域、寒い。
初夏にこの海に入る人など、バカでもやらない。
ミズキはかなり凍えている。
「ミズキ？大丈夫？」
手を触ると、かなり冷たい。

ミツキはタオルをもっとかけるが、一向に体温が上がる気配なし。
「ひぃぃっ！どうしよ！」
ミツキはミズキが上半身裸のことに気づいた。
なので、まず服を着せる。
すると、かすかだが、震えが治まったような気がした。
「はぁ、よかった」
ミツキはため息をつくと、肌についた水をふき取る。
「さすがにこんなのは習ってないわ」
とにかく、今はミズキの安全確保だ。
「しかも、こういうときに限ってドクロたちはいないし」
何も知らないやまはたちから逃げるように、ドクロたちは地下三階にいる。
「ん？・・・・・・・・・って、熱！？」
かすかだが、ミズキの顔が赤い。そして、額の手はうっすらと温かくなってきている。
「熱の薬ならあるね、そういえば」
壁にミズキを寄りかからせ、救急箱をあさる。
「おぉ、あったあった♪」
ミツキは錠剤を取り出すと、ミズキに聞く。
「飲める？」
もちろん、返事は無い。
「さぁ、どうしましょう？」
とりあえず、水の用意はしてある。
「はぁ、しかたない。本意じゃないけど・・・・・・・・」
ミツキは錠剤を口に含む。
そして、ミズキの唇に自分の唇を重ねる。
（飲んで、お願いだから）
ミズキは錠剤を水と一緒に飲む。
少しずつ、呼吸が安定してきている。
そして、小さく寝息を立て、眠って入った。

「ふぅ、まぁ、助かった??」
ミツキは言ってから、ミズキを個室へと連れて行った。

「ま、助かってよかった♪」

ミツキはつぶやいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5460a/

双子海賊

2010年10月9日22時33分発行